

琉球大学学術リポジトリ

予測不能な餌動物の量の変動に対応したイリオモテヤマネコの食性変化

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀プログラム 公開日: 2007-06-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 希, 田中, 幸子, 伊澤, 雅子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/685

PE-22 予測不能な餌動物の量の変動に対応したイリオモテヤマネコの
食性変化

(Annual changes in the food habits of the Iriomote cat *Prionailurus bengalensis iriomotensis*: responses to unpredictable changes of prey availability)

中西 希・田中幸子・伊澤雅子 (N. Nakanishi, S. Tanaka and M. Izawa)

琉球大学理学部

イリオモテヤマネコは非常に多様な動物種を食物として利用している。その餌動物の中には哺乳類や両生・爬虫類、昆虫類などのように西表島に周年生息している種もいるが、渡り鳥のようにある特定の季節にだけ西表島に出現する種もいる。また、周年西表島に生息している種の中でも、それぞれの種の習性によって活動が活発であったり、個体数が増加したりする時期がある。これまでに、ヤマネコの糞分析から示された餌動物種の出現頻度の季節変化と、それぞれの種の活動サイクルが一致することから、ヤマネコは餌動物側の活動サイクルによってその時々で利用しやすい種を柔軟に利用していると考えられている。しかし、餌動物が年によって予測できない形で変化する気候の変動などによって、通常と異なった活動パターンや習性を示した時に、本当にヤマネコが柔軟にその餌動物をシフトさせているのかどうかについては、餌種の **availability** とその変動の量的な把握が困難なため、検証不可能だと思われていた。

冬季に沖縄に飛来する渡り鳥であるシロハラやアカハラのようなツグミ類は、その飛来数が年によって大きく変動することが知られている。一方、これまでのイリオモテヤマネコの糞内容物分析からは冬季にツグミ類がヤマネコにとって重要な餌となっていることもわかっている。そこで、本研究ではこのツグミ類に注目し、予測不可能な形で大きな年変動をみせる餌に対してイリオモテヤマネコがその採餌生態をどのように変化することで対応しているかを調べることを目的とした。2003年からイリオモテヤマネコの生息状況調査のために設置している自動撮影装置によって、ツグミ類の西表島への飛来数の年変動を初めて記録することができ、2005年から2006年にかけての冬季にはツグミ類の飛来数激減が確認された。同時期に回収されたイリオモテヤマネコの糞内容物分析を行った結果、イリオモテヤマネコは冬季のツグミ類の飛来数が多い時には、ツグミ類を高頻度で利用しており、飛来数が少ない時には他の鳥類を利用することによって餌を補填していることが示唆された。